

オリンピックを無観客開催に追い込んだ新型コロナのせいで三か月のお休みを余儀なくされました。この長いブランクにもかかわらず常連の七名が顔をそろえ、難解な太平記の読みに挑戦できたのはうれしいことでした。第25巻の中心は天龍寺の創建。中世禅林が興隆する起点となったこの出来事が延暦寺など旧仏教の反撥を呼んだ事件だったことを学びました。

(二) 天龍寺の事

後醍醐天皇を慰霊 (p119～122)

「天下に災難が絶えないのは、後醍醐天皇の怨霊が原因。禅院を建立して菩提を弔えば鎮まる」という或る人の建言を受け、足利尊氏、直義兄弟は、夢窓疎石を開山として、亀山離宮の跡に天龍寺を創建した。安芸、周防両国の年貢や中国貿易船の利益を充てるなどして資金を工面し、康永4年(1345)、造営を終えた。

延暦寺の抗議 (p122～124, 127～128)

かねて禅宗の興隆に不快を募らせていた旧仏教の代表格、延暦寺は、天龍寺の開堂法要が光厳上皇(北朝)の臨席下に開催されると知って激怒、禅宗のごとき邪教に従えば国家を危うくすると唱えて、朝廷に上皇の臨幸中止、夢窓の遠流、天龍寺の破却を要求する訴状を提出した。

北朝の対応 (p128～144, 一部省略)

延暦寺の要求に対する北朝の廟議では、主要な公家の間で意見が分かれた。各人の主張は次の通り。

・坊城大納言経顯「延暦寺は、禅宗を亡国の邪宗というが、中国では、梁の武帝が禅に帰依して以来、唐宋と何百年も国家は安泰だった。禅に肩入れした北条氏が高時の代で滅んだのは失政が原因。天下の名僧、夢窓和尚を遠流など、とんでもない」

・日野中納言資明「延暦寺は王城の鎮護を受け持つ寺である。朝廷の衰微をよそに禅門が栄えるさまを、山門(延暦寺)の衆徒が憂えるのは当然ではないか」

・源大納言通冬「宗門間の対立は、双方の論争で決着をつけるのが和漢の慣例である。この際、禅と天台を朝廷に呼んで、宗論を戦わせてはどうか」

・二条関白良基「有か、空かなど、仏門の教理をめぐる論争は、古来、決着したためしがない。近年、天下の事は、何事によらず武家の計らいに依っている。この問題も、武家の判断に委ねてはどうか」
この二条良基の意見に諸卿が同意して、朝廷は延暦寺の訴状を、そのまま、幕府に回した。

一触即発 (p144～150, 一部省略)

延暦寺の訴状を見た足利尊氏、直義は「寺を建て、僧を敬って、公武で仏門に帰依しようとしているのに何の文句があるか。山門の強訴を恐れず、予定どおり、上皇の臨幸を仰いで開堂法要を挙行したい」と、朝廷に回答した。これを見て、延暦寺は強訴を決意、日吉大社の御輿を担いで入洛する準備を整えたうえで、南都の興福寺に対し、春日大社の神木を奉じての入洛と開堂法要に参加予定の公家の「放氏(藤原氏からの除名)」を柱とする共同強訴を呼び掛けた。

強訴回避 (p150～153)

山門・南都の共同強訴で帝都が未曾有の騒動に陥ることを恐れた朝廷は、開堂法要は武家の主催とし、上皇、公家は「御結縁」の名目で、翌日、供養に参上するという妥協策を提示した。延暦寺は、これによって怒りをおさめ、強訴を中止。康永4年8月29日、將軍足利尊氏をはじめとする武士だけによる天龍寺への参詣が、はなばなしく挙行された。

(四) 三宅荻野謀叛の事

足利兄弟夜討未遂 (p157～159)

(五) 地藏命に替はる事 (p159～162)

第27巻輪読予定ページ
(10月18日)

- 1) 245 貞和五年～248 御事なり
- 2) 249 これらは～252 出たりけん
- 3) 267 近来～270 多かりけり
- 4) 279 わが被官～282 なかりけり
- 5) 284 祇園の～289 ありと云々
- 6) 289 師直～292 有様なり
- 7) 294 さる程に～299 帰りける
- 8) 305 師直～309 なかりけり
- 9) 310 またこの比～314 語りける
- 10) 321 この時～
324 書きたりける